



風邪と
空手と
海釣り

川崎ゆきお

「風邪ですか？」

「ほんの少し、夏風邪だ」

「でも、こうして出て来て大丈夫なんですか」

「大丈夫って、強そうだねえ。丈夫な上、さらに大が付く」

「あ、そんなこと言えるようなので、大丈夫なんですね」

「まあ、寝込むほどのことはないって程度かな。しかし、今日はスローペースで行くよ」

「はい」

「高校のとき、担任が空手部部長でねえ」

「あ、はい」

「風邪の話をした」

「はい」

「まあ、君は聞くしかないのだから、黙って聞いてなさい」

「はい、そのつもりです」

「風邪を引いているのに、海へ釣りに行った。磯釣りだがね。あれは移動は徒歩だし、足場も悪い。砂浜を歩くだけでも体力がいる。岩場となると、今度はバランスが要求される。風邪で頭がふらついていると危険だよ。風邪より、怪我の方が怖い」

「風邪なのに趣味の釣りですか」

「仲間との約束があったんだろうねえ。その空手の先生」

「それで、風邪はどうになりました」

「それぞれ、潮風に吹かれながら体を目一杯動かしたら、風邪が吹っ飛んだらしい」

「豪快ですねえ」

「しかし、温和な先生だったよ。怒ったこともないしね」

「それが何か」

「私もそれを高校の頃聞いたのだが、ずっと覚えていてね。だから、風邪のときでもいつものように体を動かしたり、仕事をする。まあ、軽い風邪程度なら、普通に、みんなやってることだから」

「そうですねえ」

「しかし、年を取ってからは治りにくい。一ヶ月以上かかったりする。だから、慎重にならざるを得ん」

「じゃ、休んでおられたら」

「だがねえ、動いた方が治るかもしれないというのが、刷り込まれていてねえ。あの温和な空手の先生。担任だがね。そんな荒っぽい先生じゃなかったのに、その風邪の話だけがラフファイトなんだ。これは本当かもしれないと思ってねえ」

「やはり派手に動いた方がいいですか」

「汗をかいて熱が下がることもあったけど、打率は低い」

「打率？」

「治る確率がね。殆どは変化なしで、自然に風邪が抜けるまで治らなかった。しかし、二割ほど

の率で、治ることもあったんだ」

「やはり、風邪のときは安静にしていないと。休める身分なら」

「そうだね。今はその身分だけだ」

「風邪は万病の元ですから、気をつけて下さい」

「ああ、それでね」

「まだ、あるんですか」

「その空手の先生、その後、どうなったのか、心配でねえ」

「風邪は治ったのでしょ、海釣りで」

「いや、その後の人生だよ。当時先生は三十前だ」

「どういうことですか」

「今生きておられるとすれば八十前後」

「消息は分からないのですか」

「高校二年の担任だからね。同窓会もない」

「風邪をねじ伏せるような人なので、お達者なのでは」

「その印象しかない」

「はい」

「だから、風邪でしんどいとき、出ないといけないときは、その先生を思い出すんだ。治ることもあるんだって」

「今日も思い出したのですか」

「そうだ。しかし、思わしくない」

「それはいけませんよ。お帰りになっては」

「ああ、そうする」

「お大事に」

「うむ」

了